みみより会の道程　目次

No.	題　　名	著　者　名
1	戦後の開放	江　時　　久
2	清水昭雄さんの投書	江　時　　久
3	清水昭雄さんのこと	江　時　　久
4	雑誌を作ろう	江　時　　久
5	暮れの東京版トップの朝日新聞の記事	江　時　　久
6	「足踏み」の発行と第一回会合	江　時　　久
7	ろう者の教会	江　時　　久
8	順調だった会員募集	江　時　　久
9	「みみより」 の編集	江　時　　久
10	最初の例会について	江　時　　久
11	初期のコミュニケーションについて	江　時　　久
12	時代の流れと、わたしたちの青春	江　時　　久
13	開けっ広げだったみみより会	江　時　　久
14	みみより会手芸グループについて 1	須藤　多恵子
15	みみより会手芸グループについて 2	須藤　多恵子

No.1

1. みみより会の発足

江 時　久

1. 戦後の開放

だれでもよく知っているように、日本の社会における男女差別、身分差別、障害者差別など、社会の不公平が撤廃され、平等で民主的な仕組みになったのは、太平洋戦争の敗戦による大きな社会変革の結果でした。

1945年に日本は戦争に敗けて焼け野原の貧しい国になってしまいましたが、そのことは戦前までの古い秩序を廃棄し、さまざまな差別から日本の社会を一気に解放するチャンスとなりました。

たとえば、ろうの子供がろう学校に入って教育を受けることは、戦前までは義務教育ではありませんでしたから、家庭の都合でろう学校へ入学せずに、なんの教育も受けずに頭のわるい人のように見なされて生きたろう者が大勢いたのです。

また、中学校、高等学校、大学と進学するすべての受験競争には、必ず身体検査があり、身体障害を持つ者は、たとえ大きな声ならわかる難聴者でも、入学が許されませんでした。

1947年に施行された新憲法は、国民それぞれの基本的人権を尊重し、学問、思想、信教、言論の自由を保障し、すべての国民に教育を受ける権利を保障しました。身体に障害がある者も、その能力に応じて、教育の機会を与えられる自由な時代になったのです。

同じ年の学校教育法の施行によって、日本の新しい学校制度は、中学校までが義務教育になり、高等学校や大学の数が増え、入学試験においても、学科に合格した者が身体検査で不合格になるということはなくなりました。このことによって、耳が聞こえなくても、高校、大学へ進学する人たちが現れるようになったのです。

また、ろうの子供がろう学校に入学することが、この法律によって義務教育となりました。全国のろうの子供が、ろう学校へ集まる結果となったのです。このことは、その後の手話爆発の原動力になったと、わたしは思います。

1955年のみみより会の成立は、そういう戦後の教育解放の時代と重なっております。みみより会は、1954年に京都府立聾学校の生徒清水昭雄君が、「ぼくも勉強したい」と新聞に投稿して叫んだことと、それに呼応した学生たちの交流からはじまったものですが、ろう学校の高等部の生徒が、ろう学校の批判を新聞に投書するということは、戦前であれば考えられないことでした。呼応した大学生や高校生の中には、ろうや難聴の学生たちがおりましたから、みんなで雑誌を発行して、情報を交換し、お互いに励まし合っていくという聴覚障害者のための熱い動きが広がりました。

それから、50年に及ぶみみより会の歴史は、一人、二人の力で作られたものではありません。たとえば、最初に旗揚げしたわたしも、夢中になってみみより会の仕事に寝食を忘れたのは、最初の５、６年のことでした。みみより会の歴史は、それぞれの時期に活躍した人たちの情熱の連鎖で作られてきたものです。ですから、みんなで書き込むことによって、正しい記録ができあがるのだと思います。

当初は、みんなが集まって、「ろう」や「難聴」や「中途失聴」や「健聴」の事実を確認し、それぞれの理解の中で友愛が生まれ、やがて「みみより結婚」をする人たちも増えていきました。さらに、全日本聾唖連盟の中核となって活躍する人や、あたらしく全難聴の運動を起こして、その方に情熱を傾ける人たちも、会員の中から現れたのです。

みみより会自体は、行政に対して支援の申請などをすることなく、あくまでも会員の会費によって運営されてきた団体ですが、その底に流れる友愛の精神は、20世紀後半の聴覚障害者の運動を生み出す先覚的な母胎ともなったのであり、50年もつづいている歴史と会員の存在が、みみより会の意義を物語っているのだと思います。

えとき　ひさし・本名 丸山　一保(千葉県習志野市袖ヶ浦)
みみより会参与
オリジナル原稿

1. みみより会の発足

江 時　久

2. 清水昭雄さんの投書

昭和29(1954)年８月16日の朝日新聞朝刊東京版「虫めがね」欄に下の通り、京都府立聾学校高等部学生清水昭雄君の投書がとりあげられました。

未知の京都のロウ学生清水昭雄君――京都市上京区上賀茂一丁口町日野西方――からハガキが到着、特にこの東京版を指定して、東京の各大学、高校生の有志と文化、学問の交流のための友を求めてきた。ハガキには、次のように書いてある。…私は日本のロウ学校を、普通の学生と協力して立派に発展させて行こうと切に希望している京都の一ロウ学生です。東京版を通じて、東京の学生と文化、学問の交流ができるように紹介して頂きたい。どうぞ東京の各大学、高校の皆さん、恵まれない私のために学問のペン・フレンドになって下さい。

（昭和29年朝日新聞８月16日朝刊東京版－原文の通り）

耳のいたい話

本紙の東京版に、京都のロウ学校の学生が、本社にハガキをよこして、東京の各大学、高校生の有志と文通して、学問を深め、見解を広くしたいと望んでいる話が紹介された。京都市上京区上賀茂一丁口町日野西方の清水昭雄君のことである。おそらく東京の学生だけとの文通でなく、広く健康な学生と友達になりたいというのであろう。健康な人々との交際を願っているロウ学生は、清水君ばかりではあるまい。有志学生でグループをつくり、こうした希望に副うことはできないものか。

昭和二十二年の国勢調査の数字によると、オシ、ツンボ、またひどく耳の遠いものが、人口一万人に対して二十五人前後いる。これから推定すると、現在、日本には二十四万ほど耳の悪い者がいることになる。昭和二十三年には、ロウ教育の義務制が実施されて、教育の機会均等の形はとられたが、その学校は、分校を含んで、現在、全国で八十九校しかなく、就学率は四〇%にも足りないといわれる。学校が自宅から遠いところにあれば、寄宿舎に入ることなどの費用もかかり、その経済的負担に、父兄はたえないというのが、就学率の悪い大きい原因と思われる。

これらについての、適当な施策がなされなければ、「その能力に応じて、ひとしく教育を受ける」折角の権利が空文になる。幸に学校の教育を受けられるにしても、その教育のやり方が進歩したとはいえ、勉強が五官の完全なもののようにはゆかないであろう。これらの不幸な人々を、分に応じて助けようともしないのは、健康な人々の社会人としての義務を怠るものであり、清水君のように、好学のロウ学生のいることは、耳がきこえるのに、他人の言に耳を傾けようともしないものにとっては、耳の痛い話であろう。

（昭和29年朝日新聞８月17日夕刊－原文の通り）

えとき　ひさし・本名 丸山　一保(千葉県習志野市袖ケ浦)

みみより会参与

オリジナル原稿

1. みみより会の発足

江 時　久

3. 清水昭雄さんのこと

清水さんが、なぜ、新聞に投稿したのか？

その後の清水さんとの文通や、交際の中から、わたしにわかってきたことがあります。

もっとも、それがわかるようになったのは、ずいぶん年月が経ってからのことでしたが。清水さんは、数え８歳、いまでいえば、６歳のちょうどう小学校へ入学するときに耳が聞こえなくなってしまいました。原因はヘルニアということでしたが、医師の中には、ヘルニアで失聴という説明に首をかしげていた人もありましたから、これは、あくまでも清水さんが、わたしに告げたことです。

６歳の失聴というと、すでに言葉を覚えていたということになります。字も覚えはじめていたころでしょう。ですから、高校生の清水さんは、話すことができ、発声はよくわかり、読むこと、書くことができる人でした。同じろう学校の生徒の中には、生まれたときから言葉を聞くことができなかった人がおります。言葉は母親の声が赤ちゃんの聴覚を刺激することによって、自然に覚えていくものですから、母親の声を聞くことができなかった子供たちは、ろう学校の先生たちが口話法によって一生懸命に言葉を覚えさせようと努力しても、それだけでは無理なことが多いのです。自然に、生徒同士では、手話を使ってコミュニケーションするようになります。手話は、話すことが無理な生徒たちにとっては、じつに自由な言葉の世界なのです。

つまり、同じろう学校の生徒といっても、中には清水さんのように、話す、読む、書くを覚えることができた生徒と、そうでない生徒が混在しているのです。

当時のろう学校では、一律に高等部の生徒には、職業教育中心の授業をするようになっていました。せめて、耳が聞こえない子供たちが社会へ出てから自立できるように、手に職をもたせてあげたいという教育方針だったのです。

ところが、洋裁を習うことになった清水さんは、学科の授業がないことに、しだいに不満を覚えるようになります。清水さんの話によると、そんな清水さんの気持ちを、先生たちは、冷笑したということです。そして、それは、清水さんの気持ちとしては、先生たちが、ろう者全体を基本的に侮っているのだという怒りとなって爆発したらしいのです。

清水さんは停学処分を受け、自殺未遂事件を起こしました。そのことが、新聞に掲載されて、見出しは「天国で勉強する」となっていました。学校は、あわてたことでしょうね。

勉強したいといった生徒を停学処分にしたら、自殺しようとしたのですからね。

清水さんの両親は、戦争中に亡くなられたようです。親戚の人といっしょの生活でした。ろう学校では、奨学金の申請を行い、若干の奨学金支給が実現しました。英語の授業なども、清水さんだけに個別にはじまったということです。

それでも、その自殺未遂事件から、しばらくたって、清水さんは朝日新聞に投書したのです。ろう学校ではなくて、全国の未知の青年たちに救いを求めたのです。

文章は、日本のろう学校を発展させていきたい。全国の学生のみなさん、力を貸してくださいという呼びかけになっていますから、おそらく、ろう学校の先生とすれば、頭にきたでしょうね。

しかし、戦前ならば、ろう学校の生徒が、ろう学校を批判するということなどは、考えられなかったことでした。ろう学校の生徒が、ろう学校を批判したという事実は、ろう教育にとっても、日本のろう者にとっても、衝撃的な事実だったのではないでしょうか？

わたしたちは、清水さんが、そんな個性を持った生徒とは知らずに、彼の向上心、向学心に感心したのでした。

えとき　ひさし・本名 丸山　一保(千葉県習志野市袖ケ浦)
みみより会参与
オリジナル原稿

1. みみより会の発足

江 時　久

4. 雑誌を作ろう

朝日新聞東京版への投書と、これに関連した朝日新聞一面の全国への報道に応えて清水さんのもとへ全国の人たちから手紙が届きました。その中には、健聴の学生に交じって、ろう教育者やろう児の父兄、難聴の学生もいたのです。

いまわかっているのは、下の人たちです。

福村健、川本宇之介、中屋恭子、高橋慶子、中村和夫、大埜間不二子、小浜裕子、竹泉愛子、伊東蔦子、渡辺規雄、盛山等、丸山一保(江時久の本名)。

川本さんは、元教育大附属聾学校の校長だった人で，そのときは引退しておりましたが、日本の口話教育の推進の第一人者であり、また、盲聾教育の義務教育化実現のために、大きな努力をされた人です。いまでも、特殊教育関係者が必読書にしている文部省の「盲聾教育八十年史」は、川本さんが下書きをしたものだと認識しております。

また、福村健さんは、息子さんがろうの工芸家です。

川本さんは、清水さんの投書を見て、清水さんに手紙を送りました。口話教育の推進者として、川本さんが、手話を推進する人たちからは、強い批判を受けている人だとは知っていますが、清水さんに手紙を出したろう教育関係者は、川本さん一人だけだったようであり、ろう教育に関しては、強い使命感を持っていた人だと思います。「慈眼妙手」という川本さんの掲額を、地方のろう学校で見たことがあります。

川本さんは、清水さんと文通してみて、「むかしは、こんなに思考力のあるろう学校の生徒はいなかった」と、清水さんの行動力や積極性に感心しておりました。

なお、全日本聾唖連盟の元理事長であり、現在も副理事長として活躍されている高田英一さんは、京都のろう学校で清水さんの２年後輩だったそうですが、清水さんのことをよく覚えており、とても頭のいい先輩であったと述べています。

わたし自身の耳のことについては、わたしの書いた「ベートーヴェンの耳」他を読んでいただきたいと思いますが、(ろうあ連盟発行の雑誌ＭＩＭＩの2003年春季号から、小説「このゆびとまれ」を連載して、清水さんとの交流を書きますから、お読みくだされば幸いです)、当時23歳で難聴のために大学の講義が聞こえませんでした。

当時は、補聴器もまだ、なかった時代だったのです。トランジスタ補聴器が、輸入品で出回りはじめていましたが、３万円、４万円という高価なもので、(当時は大学卒国家公務員の初任給が１万円足らずぐらいでした)、とても貧乏学生には買えません。

1954年８月から何回か清水さんと文通をした後で、12月の最初の日曜日に、わたしは、京都まで清水さんを訪ねていきました。逆に12月の22日に、突然、清水さんが東京のわたしの学生寮に現れたのです。

東京に清水さんが現れたことで、清水さんのペンフレンドと、わたしも会うことになりました。川本宇之介さんのお宅にも行きました。

12月の25日に、清水さんと、わたし(丸山)、中屋、渡辺の４人で、朝日新聞本社を訪れ、たまたま応接してくれた社会部の堀長隆記者に、清水さんの投書に呼応して、聴覚障害者を励ますための集まりを作るからＰＲしてほしいと依頼しました。ついでに、最初の集会を開く場所がないから、新聞社の部屋を貸してくれないかと、思い切ってお願いをしてみたのです。堀記者は、よしきたと部屋を押さえてくれて、１月30日に第１回目の集まりを朝日新聞の会議室で行うことが決まったのですのですが、とても気持ちのいい人でした。

このとき会について、堀記者からいろいろ質問をされましたから、会の動機については、「そこに聞こえない学生がいるからです」と説明しました。「みんなで集まって仲間を確認し、雑誌を発行するつもりです」と、会の目的を述べました。

えとき　ひさし・本名 丸山　一保(千葉県習志野市袖ヶ浦)
みみより会参与
オリジナル原稿

1. みみより会の発足

江 時　久

5. 暮れの東京版トップの朝日新聞の記事

昭和29年(1954年)12月29日朝日新聞東京版に、次のような記事が掲載されました。

ろうあ者にも光を――学生が協力し奉仕の会

「健康な人と手をつなぎたい」と、この夏、京都府立ろう学校三年清水昭雄君(20)――京都市上京区上賀茂一丁口町――が、本紙に投書、「虫めがね」欄に掲載されたのがきっかけとなり、同君に寄せられた全国の友愛の手紙の主たちのうち東大文学部英文学科三年丸山一保君(23)中央大一年渡辺規雄君(20)らが中心になり、「ろうあ者に光をもたらす会」を結んだ。これらの人は、親睦と奉仕のための雑誌を発行しようと歳末の街を資金集めにかけ回っている。

清水君はヘルニヤのため、八歳の時から耳が聴こえなくなり、会話も相手の口の動きを察してしゃべる程度。孤児で日本育英会の奨学金月七百円のほか親類から三百円もらっている。アルバイトにも使ってくれず、悩んだあげくに投書した。当時五十通ほどのはげましの手紙が全国から清水君に届けられたが、以来四カ月、難聴で講義もよくきけず絶望状態になっていた丸山君や「不幸な人に少しでも役立つなら」という健康な渡辺君のほか、東京、京都、九州の大学、高校生、会社員十二人の“後援者”が毎月かかさず文通、来春卒業する清水君の就職口を見つけるため連絡し合っているうち、ろうあ者がもっと一般健康人と手をつなぐ必要を痛感、友情を盛り上げて「会」を作ろうということになった。《丸山一保君の話》今のろうあ者は社会から取り残された別世界にいる。これでは、いつまでたっても明るさを自分のものにすることが出来ない。

健康な人たちとの交わりがぜひ必要です。また学生ばかりでは実行力にとぼしいので、一般社会人の協力をお願いしたい。仲間のアルバイトやカンパで雑誌発行の準備をしています。

(昭和29年12月29日朝日新聞東京版－原文の通り)

えとき　ひさし・本名 丸山　一保(千葉県習志野市袖ヶ浦)
みみより会参与

1. みみより会の発足

江 時　久

6.「足踏み」の発行と第一回会合

前記、朝日新聞記事に住所の記載がなかったにもかかわらず、３人の方が新聞社へ問い合わせをして、わたしに手紙をくれました。

岡田秀穂さん(初代会長。後に早大文学英文学科教授)、山田二三さん(山田病院院長夫人、難聴の山田庸子さんの母親、みみより会の最大の後援者)、武井利文(ストマイによる中途失聴)のみなさんです。

昭和30年(1955年)１月20日に、最初の印刷物「足踏み」14ページを謄写版で作りました。1,800円の印刷代は、アルバイトで捻出しました。100部しか刷れません。すぐになくなってしまいました。岡田秀穂さんが、別途２千円カンパしてくれて、同じものを100部増刷し、日本ろう話学校や、「ろう者の教会」などへ出掛けていって配布しました。

「足踏み」は、いわば、呼びかけの資料です。

清水昭雄さんと、わたしで、見知らぬ世界の仲間たちに、「このゆびとまれ」と呼びかけたものです。「足踏み」で、清水昭雄さんは、次のようなことを訴えました。

「ぼくらは勉強したいのに、ろう学校では勉強を教えてくれず、先生たちは、ろう者をばかにしている。アメリカには、ろう者が学ぶギャローデット大学がある。日本は遅れている」これを読んで、ろう学校の先生も生徒も、おそらく、清水さんのはっきりした発言に、びっくりしたのではないでしょうか。わずか、200部の「足踏み」でしたが、とても大きな衝撃を与えたと思います。ろう学校の卒業生や在校生が、みみより会に興味をもって参加してくれるようになったのです。

わたしは、難聴で講義が聴こえず、これからの人生をどうやって組み立てて行こうかと迷っていたときでしたから、まったく聴こえない清水さんが、向学心に燃えて元気なことで逆に励まされた思いを書きました。全国には、聞こえない人たちは大勢いるのに違いない。仲間を確認して元気に生きよう。

昭和30(1955)年１月30日に、朝日新聞社の社会部堀記者との約束通り、有楽町の本社の会議室を借りて会合を開くことができましたが、これが、みみより会の最初の集まりになりました。といっても、会名はまだ決まっていなかったのですが。

出席者は16名で、写真が残っています。

◆出席者◆武井利文、貞山準一、丸山一保、清水昭雄、板橋正邦、武泉愛子、岡田秀穂、中屋恭子、小浜裕子、中山ミキ子、若松和子、大埜間不二子、渡辺規雄、盛山等、板橋さんと

同伴した教育大附属ろう学校の先生、大埜間さんの学友。

　このとき高校生だった板橋正邦さんは、後に全日本聾唖連盟副理事長となって活躍されました。そんな未来のことは、そのときは、だれもわからなかったのです。

　聞こえない者には、健聴者が横に座ってノートテイクをしました。最初のコミュニケーション対策です。しかし、部屋には黒板もありませんでしたから、今後の例会をどう進めるのかが課題として残りました。

この集まりで、次のようなことが決まりました。

● この会は、聞こえない人だけの会ではなく、聞こえない人と聞こえる人が一緒に協力して、聞こえない人たちのために活動する会である。

● 毎月会報を発行し、例会を開催する。

● 役員はみんなで互選する。会費は月額50円。

　このとき、会の名称について参加のみなさんから、「朗友会」、「耳寄会」などという案が出て、ほとんど「朗友会」に決まりかけましたが、板橋少年から「同じような名前の会がある。もっと斬新なものを考えた方がいい」という適切な意見が出て、決定に至りませんでした。後に岡田さん提案の「耳寄会」を、「みみより会」と平仮名に直して使うことに決まりましたが、板橋さんの反対がなければ、「朗友会」に決まってしまったかもしれません。

　「みみより会」という素敵な名称の誕生には、当時高校生だった板橋正邦さんの一言が大きく貢献したのです。

えとき　ひさし・本名 丸山　一保(千葉県習志野市袖ヶ浦)

みみより会参与

オリジナル原稿

1. みみより会の発足

江 時　久

7. ろう者の教会

日本ろう話学校の望月先生の話では、毎週日曜日に目白のキリスト教会で、通常の礼拝が終わった後で、ミス・ロイス・F・クレーマーと、石田英一牧師が、「ろう者の教会」を開いており、大勢のろう者が集まるということでした。

そこで早速、１月23日の日曜日に、「足踏み」を持って出かけていきました。このときに知り合った中途失聴の貞山準一さんは、すぐに入会を希望して、１月30日の朝日新聞の集まりに参加し、初代の会計係に選ばれました。

２月以降、わたしは、耳に障害を持った仲間と知り合いになるために、しばらくの間、毎週、この「ろう者の教会」に通いました。

ところが、まもなくこの「ろう者の教会」は、「エパタ教会」という名称の教会に発展し、牛込に移ることになりました。したがって、わたしが、目白まで通ったのは、ごく短い期間だったのですが、でも、この「ろう者の教会」のおかげで、たくさんの仲間を知ることができたのです。

最初は、礼拝への参加をためらっていた岡田秀穂さんも、毎週参加してくれました。

岡田さんは、長い結核療養生活のために、大変遅くなって34歳で早大英文を卒業された人です。当時は、進駐軍の翻訳官をやっていて38歳の独身でした。半生の闘病生活の後で、きわめて熱心にみみより会のために活躍されました。

わたしは、岡田さんとコンビを組みましたが、聞こえなかったときには岡田さんに確認することができたわけで、難聴の不備を岡田さんに補ってもらいながら、日本ろう話学校の大嶋功校長、望月教頭、クレーマー先生、石田牧師、また、すこし後になってから、ろう教育の長老川本宇之介先生や、綴り方教育の櫃田祐也先生などと岡田さんを交えて知り合いになることができたのです。

岡田さんは、後に母校の早稲田大学文学部英文学科の教授となられました。

ミス・クレーマーは、アメリカの教会から派遣された宣教師です。20歳ぐらいの若いときから、キリスト教の伝導のために日本へやってきたのです。以来、何十年もの間、戦争中も日本を離れずに独身のまま布教活動をし、また日本ろう話学校の創立にも参画されて、聞こえない人たちの相談相手にもなっておられました。

信仰によって生涯を神に捧げ、私欲を捨てたミス・クレーマーの生き方には、強い感銘を受けました。いま、70歳を超えて古狸みたいなわたしも、その当時は、感受性の強い、純真

(？)な青年だったのです。

次の人たちは、「ろう者の教会」で知り合った人たちです。亡くなった人もおりますが、みんな初期のみみより会の中核となって活躍した人たちばかりです。

外山和郎、島田節子、永田哲雄、伊藤由吏代、加藤光二、関根真明、西潟雅子、佐藤しげ子、清水京子、貞山準一。

もともと、バイブルを熱心に読んでいた武井利文さんも、「ろう者の教会」に参加するようになりましたが、その後もずっと、生涯をイエスと共に生きておられます。

鈴木克美さんは、わたしの高校時代の同級生、速川貫一さん(後にカルフォルニア大学教授)からの紹介で知り合った人です。当時は、東京水産大学の学生で、「足踏み」を送ると、すぐに目白の集まりに顔を出して仲間になりました。鈴木さんが、その後、全国の水族館で難聴をものともせずに仕事をされ、やがて高名なお魚博士として東海大学教授、海洋博物館の館長となって活躍されたことは、みなさんが、みみより会の誇りとしてよくご存じのことです。

武井さんも、鈴木さんも、文を書くのが好きで上手で、「みみより」の誌面を最初から読みごたえの原稿で飾ってくれました。鈴木さんの妹の鈴木元美さんも、静岡からときどき上京して、例会に参加するようになりました。

外山さんがガマ、加藤さんがゴリラ、永田さんがタワシ。みんな、そんなニックネームで呼びっこしていました。鈴木さんはＳＺ。はまの・せいごのペンネームも、そのころから使っていました。だれかの発案で、回覧ノートが生まれ、みんな自由に書き込んで郵便で回します。50年も経った現在、ほーたんさんが作ってくれたホームページの掲示板で、みんなが、わいわいガヤガヤ、チャットを楽しむようになりましたが、会員相互の触れ合いは、そのころすでに回覧ノートという形ではじまっていたのです。

会計係の貞山さんが、突然、関西に引っ越すことになったために、西潟雅子さんが会計係を引き継いでくれることになりました。現在の高寺志郎夫人です。会計は、その後、外山和郎さんがやり、島田(現在・大森)節子さんに引き継がれました。

そして、何年か後に高橋広司さんが会計の専門家として登場し、それに伊藤由吏代(矢島秀子)さんが協力して、みみより会事務所の仕事を担当されるようになるのです。

外山和郎さんは、当時は明治学院大学の学生でした。都立大塚ろう学校の中等部から、都立北園高校へインテグレーションを実現した人で、おそらく、ろう学校の生徒が都立高校へ進学したというのは、外山さんが日本で最初だったのではないでしょうか。

外山さんは、大学を卒業すると、厚生省の職員となり、そのころできた聴覚言語障害者更生指導所に勤務して、生涯を聞こえない人たちの福祉の仕事に捧げられました。大勢の人たちが、外山さんにお世話になったのです。

島田節子さんは、聞こえない耳で国家公務員として勤務された後、55歳からアメリカの大学に３年半留学し、アメリカ手話を習得して帰国されると、それ以後、国際的な手話の世界で大活躍しているほか、盲聾者協会の理事としても地道な運動を続けており、そのことは、

みなさんがよくご存じの通りです。

　いずれにしても、みみより会の50年間のバックボーンとなった人たちが、すでに50年前の「ろう者の教会」の仲間であったこと、そして、後に日本中の聴覚障害者の誇りとなった人々であることに、深い感慨を覚えます。

えとき　ひさし・本名 丸山　一保(千葉県習志野市袖ヶ浦)
みみより会参与
オリジナル原稿

1. みみより会の発足

江 時　久

8. 順調だった会員募集

1955年１月にはじまったみみより会は、お互いの口コミで急速に会員を増やしていったのですが、みみより会以前に、すでに小さな聴覚障害者の集団として活躍していた下記の二つのグループがありました。

①　小石川の小日向台町小学校に戦前付設された難聴学級に学んだ同窓生たちの集まり

②　ストマイ注射治療で失聴した須藤多恵子さんや鈴木光子さんらが、朝日新聞の「ひととき」欄に投書したことを通じて知り合った中途失聴者の主婦たち
の集まり

その二つのグループのみなさんは、みみより会結成の動きを知ると、グループごと、みみより会に合流してくれました。

①　については、最近になってから伊藤由吏代(現在の矢島秀子)さんに教えてもらったことです。

②　の須藤さんを中心とする主婦グループは、みみより会に参加すると、会の中の若い女性たちを集めて「手芸グループ」という活発な運動を立ち上げ、やがて手芸品販売のバザーなどを新宿や銀座で開催するようになりました。みみより会には、最初から女性たちの参加があり、みんな元気で若くて明るい人ばかりでした。みみより会の手芸品の店を出そうという目標をかかげて、楽しげに集まっていました。日本の社会は、戦後男女差別が撤廃され、男女同権の時代となったのですが、なお隠然たる男女差別が残っていました。みみより会の女性たちが女性たちだけで集まって活躍したのは、新時代へ向けての一つの女性運動でもあったと思います。

難聴学級の同窓会の話と、手芸グループの話は、別途、加藤光二さんや、須藤多恵子さんに、書いてもらって、このホームページに記録してほしいと思います。

1955年１月、２月、３月の順で、呼びかけの資料、「足踏み」、「みみより」、「胎動」の３冊を出しました。その後で創刊号を４月ごろ出す予定でしたが、結局、呼びかけ資料の４号目を関根真明、鈴木克美の二人が編集して出すことになりました。したがって、呼びかけ資料としては４冊出したことになります。

驚いたことには、最初の「足踏み」は、わたしと岡田さんがお金を拠出して作ったのですが、それからは会員の会費や寄付で200部2,400円の印刷代が、ちゃんと賄えたことです。

１月にはじまった会の会員数は、３月に発行された「胎動」に掲載された会員名簿による

と100名を超えております。はじめ、30人集まればと思っていたのに、これは奇跡みたいに順調な話でした。

清水さんの投書からはじまって、朝日新聞に報じてもらったことが、大きかったのだと思います。その後、みみより会については、毎日新聞、日本経済新聞、読売新聞が、新聞社の方から取材にきて報道してくれました。1956年には、東京新聞社の週刊誌のグラビア特集として５ページにわたって、手芸グループのバザーの様子や、編集部の様子、日本ろう話学校での読話講習会の様子など、会員の笑顔が写真で報道されました。

その他にも、すこし後の話だと思いますが、大森節子さんの記憶では、「週刊新潮」のグラビアページにも、みんなの笑顔が掲載されたことがあるそうです。

1955年３月に日本ろう話学校で第２回目の例会を開きましたが、そのときは、まだ30名ぐらいの参加でした。でも、スタートして２回目の集まりなのですから、すばらしいことだったのです。席上で、会の名称を「みみより会」とすることが決まり、また最年長の岡田秀穂さんに会長をお願いし、わたしが運営委員長になりました。

岡田さんには、この後、30年近く会長としてみみより会にご尽力いただきました。

さて、最初、京都ろう学校の生徒、清水昭雄さんを励ます学生たちの集まりとしてはじまったみみより会は、あっというまに、耳が聞こえない人たちの方が多い集まりになってしまいました。

しかし、みみより会は、決して障害者だけの団体になったわけではありません。岡田さんや、中屋恭子さんのように、最初から参加している健聴者の会員もいるのです。
みみより会は、聴力によって差をつけずに、ろう・難聴・中失、健聴のそれぞれが会員になりました。そのことを、「四つ葉のクローバー」という言い方で表して、後に四つ葉のクローバーのデザインで会の旗が作られました。それを作ったのは、いつだったのでしょうか？だれが作ったのでしょうか？少なくとも、そのことには、わたしは記憶が定かではないのです。なにしろ、50年といえば長い歴史です。それは、決して一人や二人の力ではありません。わたしが全力をあげてみみより会のために奔走したのは、1960年までのことです。それ以後は、結婚し子供ができたりして、みみより会の編集や運営を担当することはできませんでした。ですから、知らないこともたくさんあるのです。

みんなに、みみより会の歴史を書いてほしいと思うのは、そのためです。

四つ葉のクローバーは、このホームページの下絵にも出てきますが、みみより会は、ろう者の集まりでもなく、中途失聴、難聴者だけの集まりでもなく、全員で聴覚障害者の明るい生活のためにがんばっていこうというのが、基本方針でした。そのことは、岡田さんと論じ合ったことですから、よく覚えております。それが、変更になったという話はありません。

ところで、清水昭雄さん自身は、1955年３月に京都ろう学校を卒業したものの、京都では仕事がありませんでした。

ろう学校の職業教育に反発したのですから、就職については、学校の協力もなかったのです。当時は、身体障害者の雇用促進に関する法律などはなく、また聴覚障害者のための更生

指導所のような施設もありません。

清水さんは、東京で仕事をしたいと希望するようになりましたが、耳が聞こえない青年が、いきなり東京で自活するといっても、当時は、まったく無理だったのです。

第一、家がありません。空襲で焼け野原になってしまった東京の街は、復興途上にありましたが、人間は、みんな小さな掘っ建て小屋に住んでいる人が多かったのです。

わたしは、大学寮のおかげで、東京の生活ができたのでした。

仕事を求めて、結局、清水さんは上京して、武井利文さんの部屋にやってきます。

清水さんや武井さんが、どんなに苦労をしたかということを中心に、いま、青春小説「このゆびとまれ」を書きました。ろうあ聾唖連盟発行の「ＭＩＭＩ」の３月15日発行予定号から連載がはじまります。ぜひ、みなさんも読んでください。

その時代には、五体健全な人でも、なかなか仕事なんて見つからなかったのです。

なにしろ、日本中が焼け野原になった戦争が終わってから、まだ十年も経っていなかったのですから。しかし、日本はゆるやかに復興をつづけておりました。平和には希望がありました。みみより会は、清水さんの投じた一石からささやかな花を開いて、毎月の雑誌発行と例会開催を実施する聴覚障害者のための運動として、ゆるやかにスタートすることができたのです。

この会をつづける人たちは、すべてボランテイアでしたが、みみより会をつづけることは、自信や喜びになりました。とにかく、初期のことだけを記述すれば、最初の会報と会誌の発行、それに例会の実施と、合宿企画などを、みんなが分担することによって、会への愛着も増えていったのです。

えとき　ひさし・本名 丸山　一保(千葉県習志野市袖ケ浦)
みみより会参与
オリジナル原稿

1. みみより会の発足

江 時　久

9.「みみより」の編集

1955年からはじまったみみより会では、みんなが、力を合わせて雑誌を発行し、例会を開催し、また、最初の年から合宿を実施することができました。

それについて、編集、例会、合宿、それぞれに歴史が生まれました。その一つ、一つを、わかっていることだけ記しておきます。

まず、編集です。

みんなが力を合わせたことは、最初のころの編集発行物の実績と編集責任者の顔触れが変わることで、よくわかると思います。当時は、ＦＡＸなどはありませんし、電話だって庶民の家庭には、まだなかったのです。連絡は、すべて郵便か、直接相手の家を訪問するしか方法がありませんでした。そんな時代には、一々、編集会議を招集して、みんなの意見を集めて企画するということは、それだけで時間がかかりすぎて無理だったのです。

手話通訳や要約筆記の人たちのいる現代とは、まったく違った時代でした。

毎号の編集は、今月号はおれが作るから、来月号はお前が作れ、次の号はきみがやれという具合に、みんなで編集を交替して担当したのです。1956年から１年間ほど加藤光二さんが、ずっとやってくれました。いまのカッコーさんです。編集長というような名称はなかったけれども、加藤さんは編集長だったのです。その後で活版印刷になってからは、編集レイアウト、写真や活字の指定など、いろいろ専門的な技術が必要になってきましたから、出版社に勤務していたわたしが連続してやるようになりました。

ワープロもないから、原稿は手書きです。編集者が清書して印刷へ回さないと、印刷できない原稿もありました。そういう編集の仕事にみんなが参加することによって、みみより会の結束は、いっそう固まりました。

以下に、最初のころの編集実績を紹介します。

《発行物と編集者》

発行年月	発行物内容	中心編集者	印刷所
1955年１月	呼びかけ資料「足踏み」	丸山・清水	孔友舎謄写版
２月	呼びかけ資料「みみより」	丸山	孔友舎謄写版
３月	呼びかけ資料「胎動」	丸山	孔友舎謄写版

5月	「みみより」創刊号	丸山・清水	前阪謄写版
7月	呼びかけ資料「パンフレット第４号」	関根・鈴木	吉田謄写版
7月	会報「みみより通信」No. 1	丸山	前阪謄写版
9月	「みみより」第２号	丸山	前阪謄写版
10月	会報「みみより通信」No. 2	鈴木	前阪謄写版
11月	会報「みみより通信」No. 3	岡田	謄写版
12月	会報「みみより通信」No. 4	鈴木	前阪謄写版
1956年２月	会報「みみより通信」No. 5	丸山	前阪謄写版
3月	会報「みみより通信」No. 6	外山	前阪謄写版
4月	会報「みみより通信」No. 7	中屋	前阪謄写版
5月	会報「みみより通信」No. 8	武井	前阪謄写版
6月	会報「みみより通信」No. 9	加藤	前阪謄写版
7月	会報「みみより通信」No.10	鈴木	前阪謄写版
8月	「みみより」第３号	丸山	前阪謄写版
8月	会報「みみより通信」No.11	鈴木	前阪謄写版
9月	会報「みみより通信」No.12	鈴木	前阪謄写版
10月	会報「みみより通信」No.13	鈴木	前阪謄写版
11月	会報「みみより通信」No.14	加藤	前阪謄写版
12月	会報「みみより通信」No.15	加藤	前阪謄写版
1957年１月	会報「みみより通信」No.16	加藤	前阪謄写版
2月	「みみより」第４号	鈴木	前阪謄写版
2月	会報「みみより通信」No.17	加藤	前阪謄写版
3月	会報「みみより通信」No.18	加藤	前阪謄写版
4月	会報「みみより通信」No.19	加藤	前阪謄写版
5月	「みみより通信」５月号通巻20	加藤	杉並印刷研究
6月	「みみより通信」６月号通巻21	加藤	杉並印刷研究
7月	「みみより通信」７月号通巻22	加藤	杉並印刷研究
8月	「みみより通信」８月号通巻23	加藤	杉並印刷研究
9月	「みみより通信」９月号通巻24	加藤	杉並印刷研究
10月	「みみより通信」10月号通巻25	加藤	杉並印刷研究
11月	「みみより」11月号通巻26	丸山	創巳堂印刷
12月	「みみより」12月号通巻27	丸山	創巳堂印刷

「みみより」は、創刊号から、和歌山ろう学校出身の前阪典彦さんにお願いし、それは、見事な印刷でした。しかし、謄写版だと写真が掲載できないし、広告もとれないのです。第３

種郵便物の認可も下りません。

1956年の11月から57年の10月まで担当した加藤光二さんは、前阪さんの手書きの謄写版印刷から、同じ謄写版印刷ではありますが、タイプライターを使って印字する印刷に変え、また、新聞形式の通信を雑誌形式に発展させました。

しかし、これでも、写真掲載は無理です。

1957年の10月、そのころ小さな出版社で英語教科書の編集をしていたわたしが、住んでいた新宿区百人町の３畳のアパートの近くの印刷所を回って、「みみより」の活版化の値段交渉をしました。どこの印刷所でも断られましたが、たまたま創己堂印刷の和南城さんが群馬県の沼田出身で、わたしが隣の渋川出身だったことから、同郷の誼みで引き受けてもらえることになりました。

現在の木村二郎社長は、まだ若い社員でしたが、まさかわたしと同郷だった和南城さんの「よしきた」の一言から、50年近くも儲からない「みみより」と付き合いになるとは夢にも思わなかったのではないでしょうか？

心から感謝している次第です。

1957年11月号から、編集部をわたしの３畳のアパートに固定し、「みみより」は、ようやく活版で印刷されるようになり、会員の顔写真の他、巻頭の写真ページも掲載できるようになりました。

1958年１月号からは、「リオネット補聴器」、「トリオ補聴器」の広告をもらえるようになりました。

第三種郵便物としての認可も、新宿郵便局に申請して認可を得ましたが、そういう一つ一つの手順を経て、「みみより」のフォーマットを確立することができました。

以上の説明で、お気づきと思いますが、じつは、500号になる「みみより」の通巻ナンバーは、「みみより」創刊号からのものではなくて、1955年７月からはじまったミニ新聞形式の「みみより通信」という会報１号からの通巻ナンバーなのです。

ですから、みみより会は、500号の他に、「足踏み」、「みみより」、「胎動」、「パンフレット第４号」、「みみより創刊号」、「みみより２～４号」の８冊を発行しているのであり、じっさいには500号は、508号になるのです。

えとき　ひさし・本名 丸山　一保(千葉県習志野市袖ケ浦)
みみより会参与
オリジナル原稿

1. みみより会の発足

江 時　久

10. 最初の例会について

以上でわかる通り、みみより会は、まず雑誌を発行することから、大勢の若者を集めたのです。しかし、雑誌を発行することになれば当然のことですが、雑誌の上で知り合った仲間同士が、毎月一度は会場を決めて集まりたいということになります。

個人的な感想をいえば、わたしは、雑誌の編集には自信がありましたが、人を集めて、その前へ出て話をするということは、あまり好きではありませんでした。わたしは、聴覚障害のために迷っている旅人みたいなものです。みんなを前にして、「こうやるべきだ」などと、リーダーとして政治家のように檄をとばしたりすることには、根拠を持ちません。ただ、「がんばろう」としかいえませんでした。「何をがんばるのか」と質問されると、当時としては、まず、「仲間が大勢いることを確認していこう」としかいえなかったのです。「やっているうちに道がわかると思う」なんて、いま考えると心細いリーダーでした。

そのころは、難聴者とろう者のコミュニケーションの方法については手探りです。補聴器が普及し、手話の花が咲いたのは、ずっと後のことなのです。どうしたらいいのか、と会の行く先については毎日考え、「みみより」の読者からも問い合わせが届きます。

ところが、みみより会の例会は、そんな神経質な杞憂をぶっ飛ばして、若い力で続いていったのです。わたしが司会をしなくても、例会を楽しく司会進行してくれる人は何人もいました。タレントという言葉がありますが、みみより会は、耳が聞こえなくても、タレントみたいな人材が大勢揃っていたのです。

一例をあげると、外山和郎さんです。

外山和郎さんは、秀逸でした。すべてパントマイムで、みんなにわかるように話をしてくれるのです。補聴器は当時まだまだ目立つほど大きなものでした。外山さんは、補聴器が使えないろう者でしたが、「補聴器が小さくなればいいね」と、みんなを励ますような話をして、「きっと将来は小さくなる」と断言しました。それが小さくなっていく様子をパントマイムでやります。最後は鼻の穴に入ってしまう。それで、鼻の穴をいじくって見せる。鼻の穴の中の補聴器の音量調節をする様子をおもしろおかしく演じるので、例会に集まった人は笑いこけましたが、聴覚障害を持った者同士の優しさが伝わり、体全体で表現する巧みさなどは、とても魅力的でした。

現在、ほんとうに耳の穴に収まってしまう補聴器があるのですから、外山さんの冗談もすごい想像力だったのですね。

団さんは、最初に参加したときから、手品を披露してみんなを煙りに巻きました。
長身でとても感じのいい人です。にこにこしている。中途失聴でどんなに心に傷を負ったことかと思うのに、そんな哀しい表情は少しも示さない。団さんが手品をやると、みんなが期待で目を輝かせるようになりました。
集まりというのは、希望がなければ大きくならない。
みみより会にとっては、大勢の若いいろいろな才能を持った聴覚障害者が集まったこと自体が、集まりを大きくするための希望になったのだと思います。
聴覚障害者が集まる会だから、さぞかし暗いだろうと思って例会を覗いた人は、みんなにこにこ笑っている当時のみみより会の若さで輝く姿を見て、きっと驚いたのに違いありません。
最初の１年半ぐらいの期間は、以下のような会場でやりました。

《例会及び合宿など》

実施年月	場所・会場	交渉
1955年１月	朝日新聞社会議室	丸山・清水
３月	日本ろう話学校	岡田・丸山
４月	筑波大学附属ろう学校	板橋
６月	目黒英語学校	岡田
７月	都立大塚ろう学校	外山
８月	伊東市・山田別荘合宿	山田・丸山
９月	目白教会	丸山？
10月	都立品川ろう学校	岡田・木口・大川？
11月	八王子市・野猿峠ハイキング	藤川・外山？
12月	品川ろう学校新宿分校	岡田
1956年１月	ヘレンケラー会館	岡田？
２月	品川ろう学校新宿分校	岡田
３月	横須賀市・大楠山ハイキング	岡田？
４月	日本ろう話学校	団?
５月	日本ろう話学校	

その当時は、公民館や福祉会館のような公共施設は、どこにもなかったのです。厚生省の国立聴覚言語障害者更生指導所(いわゆるろうあセンター)が、全国ではじめて新宿の戸山町に開設されたのが、1957年末のことです。集まるといえば、ろう学校にの教室を借りる他には手がない状態でした。
ろう学校の教室を借りるためには、それぞれのろう学校の出身者が、母校と交渉してくれました。

最初のころの会場の交渉では、岡田会長の聞こえる耳が頼りになりました。

1956年４月以降、みみより会は12年間の長い間、当時京王線桜上水駅の近くにあった日本ろう話学校で例会を開くようになりましたが、この経緯はすべて同校の大嶋功校長及び望月敏彦教頭先生が、みみより会を信頼して、毎月の第３日曜日に教室の使用許可を与えてくれたご好意によります。

戦後の時代というのは、あの焼け野原のような日本に、アメリカの文化がどっと押し寄せてきた時代ですが、ろう教育の義務教育化の流れの中で、アメリカ人の創立になる日本ろう話学校は、日本で唯一の私立ろう学校として、当時は公立学校の沈滞を尻目に、とても評判のいい元気な学校でした。

みみより会の創設に当たって、わたしと岡田秀穂さんは、真っ先に、日本ろう話学校を訪問して、大嶋、望月の二人の先生にお目にかかり、「足踏み」を手渡して、これからのご指導をお願いしたのですが、初対面のそのときに、３月例会に教室使用のお願いをして快諾をいただきました。さらに、会の所在地を、とりあえず日本ろう話学校内とすることで、お許しをいただいたのです。

ですから、「みみより」創刊号の奥付には、発行所は日本ろう話学校内のみみより会となっています。

創立から１年半たって、1956年４月からみみより会の例会が、レギュラーで日本ろう話学校を会場にすることができたのは、その時期までに、日本ろう話学校の先生方が、みみより会をいっそう信頼してくださるようになっていたからでしょう。

先日、岡田さんと久しぶりにお話しする機会がありましたから、みみより会がどうやって日本ろう話学校をレギュラーの例会場とすることができたのか、経緯はどうだったのであろうかと、話し合いました。岡田さんにも、わたしにも、そのことで大嶋校長先生に相談した記憶は、とくにないのです。

結局、その当時のみみより会の会員は、日本ろう話学校の卒業生や在校生が大勢になっていたことは確かだし、とりわけ、同校が開催していた中途失聴者のための「読話講習会」に、鈴木克美さんが参加するようになって、そこに通っていた、団順一さんや、藤川浩一さんや、高寺志郎さんたちが、鈴木さんに誘われてみんなみみより会に参加するようになったのだから、そのことを考えると、学校の方からみみより会に対して、教室を使ったらどうかという提案を親切にしてくれたのかもしれないという想像になりました。

とくに団さんは、読話には熱心な人で、その後数年にわたり、日本ろう話学校の松沢豪先生と協力して、みみより会の例会に読話講習のコーナーを作り、また、その講義録をまとめて「みみより」に掲載する作業を熱心にやってくれましたから、もしかしたら、団さんと松沢先生の日常の雑談の中で、みみより会の例会を日本ろう話学校で固定し、そこで松沢先生が読話講習会をやるという案が出たのかもしれません。松沢先生が、大嶋校長先生や望月教頭先生を動かしてくださって、みみより会の例会の固定はすんなりと決まったと考えることができます。

いずれにしても、みみより会の例会の会場が日本ろう話学校に決まったのは、鈴木さんが日本ろう話学校の読話講習会に通いはじめたこと。そこで知り合った団さんが、読話に大変熱心で、松沢先生と親しかったことなどのおかげだったということは、それほど間違った推測ではないと思います。

とにかく、例会会場が固定されたことは、会にとってはほっとするようなことでした。

このことの経緯を改めて質問する暇もなく、団順一さんは、昨年(2002年)12月25日に71歳で亡くなられました。

みみより会では、今年の２月16日に、「偲ぶ会」を開催し、みんなが集まって心からご冥福をお祈り申し上げましたが、そのことは、このホームページに、ほーたんさんが、きちんと報告をしてくださったことです。

えとき　ひさし・本名 丸山　一保(千葉県習志野市袖ヶ浦)
みみより会参与
オリジナル原稿

1. みみより会の発足

江 時　久

11. 初期のコミュニケーションについて

みみより会の例会は、最初から毎月第三日曜日に行われます。このことは、50年に近くなっても変わっていません。会誌「みみより」は、ときどき、合併号を発行していますが、例会は毎月行ってきましたから、いままでに、何回行ったことになるのでしょうか。

雑誌が500号を迎えるのですから、例会の回数は、600回ぐらいになるかもしれません。本当に、歴代の役員のみなさん、ご苦労さまです。

さて、例会の課題は、最初、コミュニケーションでした。

耳が聞こえない人たちが集まって、一体どうやって参加者のコミュニケーションを行うのか、最初は全く手探りの状態だったのです。

ろう学校へ通ったり、難聴学級に通った経験のある人たちは、すでに仲間を持っています。しかし、みみより会に集まった人たちは、みんな聞こえる人たちの中で一人だけ聞こえずに、どうしてなんだ、どうしたら聞こえるようになるんだと、人生に対して不安と怒りを感じていた人たちが大部分だったのです。例会に出てきた人は、みんな恥ずかしそうにしていました。中には、例会に出席する勇気がなかった人も大勢いました。わたしたちは、手紙だけでは、なかなか例会出席に踏み切れない仲間たちを引っ張り出すために家を訪ねたりしました。世の中に同じような耳の聞こえない人たちが大勢いることがわかると、それだけでも、それまで引っ込み思案だった人たちが、ほっとして、例会を楽しみにするようになります。例会では、みなさんがそれぞれ仲間と出会い、コミュニケーションの情報や、生活・職業の情報や、医療の情報や、交際相手の情報などを、教えられたり、教えたりしたわけです。みんな、例会を通して、「ろう」と「難聴」があること、人によって難聴もさまざまであることなど、耳についての知識も理解するようになっていったのです。

人生に対して不安と怒りを感じていた人たちが、優しさを知ることにもなりました。

筆談ができる人たちは、筆談をしました。大きな声なら聞こえる人は、大きな声で会話をしました。

しかし、手話を使って話をするということは、まだ、その当時はなかったのです。

いま考えてみると不思議な話ですが、京都ろう学校の清水昭雄さんも、わたしたちの前では、手話を使いませんでした。

当時のろう学校は、どこのろう学校でも手話禁止でした。

ろう学校自体は、とても活発に広報活動もしていたのです。いま、人工内耳の手術に確信を持った医師たちが、ろうの赤ちゃんに人工内耳手術を薦めるために、ラジオやテレビで積極的に語っておりますが、それと同じように、当時は、ろう学校の先生たちが、ラジオなどを通じて、ろう児の教育について早期教育の必要を訴えてたものです。

ろう学校では、ろうの子供を放置しておくと、言葉を覚えるチャンスを失ってしまう。

早い時期から、ろう学校で口話法による教育を与えなければならないというのが、全国のろう学校で一貫した考え方でした。

その場合、「手話」は「手まね」と呼ばれていて、ろう学校の先生たちが、口話法を教える上で邪魔になる悪習という認識になっていました。だから、どこのろう学校へ行っても、「手まねは止めましょう」とか、「手まねはみっともない」というような掲示が出ていました。戦争中には、手まねを使った子供は体罰を受けたということです。

そして、先生たちは、口を大きく開いて発音し、それを生徒に読み取らせる読話の練習に一生懸命でした。先生も読話を信じ、その教えを受ける生徒たちも一生懸命でした。

「ろう者の教会」でも、牧師さんは手話を使いません。

ゆっくり、口を大きく開いてしゃべれば、耳が聞こえない人たちにもわかると、大人たちは信じていたのです。

結局、みみより会の場合も、司会者や発言者がゆっくりとしゃべり、それを岡田さんやわたしなどが、耳で聞いて黒板に文字で書くという方式で例会を進めました。

白墨の粉まみれになって、要約筆記の方法をとったのです。

そのことは、みみより会では複雑な会議や討議がなかったということにもなります。

だれかが障害者の運動について、タイムリーな意見を述べたとしても、それを、全体の論議にすることが難しかった。一々、黒板に書いて討論を行うことは、筆記が追いつかず、集中できないのです。

それだけに、手話通訳と要約筆記通訳の協力を得て、講師を招いて講演会などを行っている現代のみみより会の例会を見ると、じつに隔世の感があります。

みみより会の例会が、毎月、日本ろう話学校で開催されるようになると、同校の松沢豪先生が、毎回、読話講習会を実施してくれるようになりました。

当時は、口話法への信頼や憧れは絶大でした。松沢先生の講習会は、講義録を「みみより通信」に毎号掲載することになりました。その原稿は、松沢先生ご自身の他、後には団さんがまとめてくれたと思います。

弁護士で、全日本ろうあ連盟で活躍している松本晶行さんの著書『ろうあ者・手話・手話通訳』という本を読むと、松本さんが京大の学生だった1963年～66年ごろ、読話講習会を熱心にやっていたと書いてあります。手話を聞こえる人たちに教えることなど、思いもつかなかったと述懐しております。ろうあ連盟の元理事長の高田英一さんも、立命館大学の学生時代に、読話研究会をやっていたそうです。

ろうあ連盟を代表するリーダーたちがそうだったのですから、みみより会においても、手

話を覚えたら便利だという発想は、当初はまったくなかったのです。

読話を習って口が読めるようにしたいと願う人が圧倒的でした。

松沢先生の読話講習会が、いつまでつづいたのか、正確にわかりませんが、時期的には、1968年秋に日本ろう話学校が町田市野津田に新しい校舎を建設して移転するころまで、みみより会の例会は、日本ろう話学校のお世話になったのだと思います。

それはまさに、ろう学校における口話教育全盛の時代だったのであり、松本さんの読話講習会の話とも時代が一致するものです。

ところで、わたしが、みみより会の先頭に立って夢中になることができたのは、50年の歴史から見れば、ほんの最初の５年間ばかりの時期のことでした。

30歳手前の年齢になったわたしは、当時、新大久保の三畳の木造アパートに住み、部屋の入り口の柱に墨書した「みみより編集部」という看板を掲げていました。毎日、全国の仲間から手紙がたくさん届きます。訪問者は後を断ちません。日曜日になると、一度に15人も集まったことがあって、三畳の部屋ですから、みんな押しくらまんじゅうみたいな状態でした。若くて、貧しかったから、楽しかったのです。しかし、いくら楽しくても、わたし自身の生活をどうするのか？そのことが問題になりました。

わたしは、編集能力には自信がありましたが、そうだからといっても、みみより会の先頭に立ったまま、片手間で会社に勤務できるほど、社会は甘くはありません。しっかりした会社に務めれば、生活は安定しますが、みみより会の仕事はやっているわけにはいきません。そうかといって、みみより会から、生活費をもらうわけにはいかないのです。

わたしは、方針として、編集や例会などの事業と会計の責任を最初から分離して、会を運営しておりました。せっかくのみみより会が、お手盛り疑惑などを作ることは、絶対に避けなければいけないからです。

結局、わたしは、1959年の秋に、当時開局したばかりのフジテレビの中途採用試験に合格したのを機会に、1960年からみみより会の仕事にひとまず区切りをつけて、自分の生活を固めることにしました。

みみより会には、すぐれた才能を持つ仲間がたくさんおります。その中には、会社に拘束されない自由業の人もいます。みんなに任せればいいのだと思いました。じっさいに、みみより会は、以後、いろいろなみなさんが交替して役員を務め、紆余曲折を経ながらも50年に近い歴史を刻んできましたが、みんなボランティアで仕事をし、自分の金を会に寄付した人はいても、利得を得た者がおりません。豊かになった現代では、ちょっと知恵のない話のようにも思えますが、欲得づくでなかったから、みみより会の仕事は、かくも長くつづくことができたのだと思います。

えとき　ひさし・本名 丸山　一保(千葉県習志野市袖ケ浦)
みみより会参与
オリジナル原稿

1. みみより会の発足

江 時　久

12. 時代の流れと、私たちの青春

ここまで、みみより会の発端から、記憶を並べてみました。

みみより会の歴史は、戦後の日本の聴覚障害者の社会的運動を物語る上でも、欠かすことのできないものであると思います。

みみより会に集まった人が、どんな意見を持ち、どんなふうにみみより会に集まることを心の拠りどころとしたかということについては、「みみより」の一冊、一冊が語っていることです。若いわたしたちは、ただ、ひたすらに、この集まりをつづけることが、社会のために必要だと信じて元気よくやってみたのです。

1960年１月号(50号)の冒頭に、わたしは、次のように書きました。

冷たい風の日があった。手がこごえていた。一つの何かが、薄暗い印刷所の戸を開けて外へ出た。声があがった。戸の外で待ち構えていた男の群れが、それを押えた。喜びが紙の上に刻印されていた。俺たちは何を始めたのだろう。わからなかった。けれど俺たちは何かを始めたのだ。何かが男たち腕を組ませた。こごえた腕を組んで、それから彼等は高らかに歌って歩み始めた。もう、五年も前の話。

その時の風と叫びと腕組みの強さを男たちはまざまざと覚えている。みみよりが指折ってきた五つの年――彼等を押しまくった何ものかが、今の彼等にはわかるのだ。若者よ、みみよりに尽くす耳の不自由な若者よ。お前たちを進めたのは青春なのだ。明るい日ざし以上の人間の青春が、みみよりを進めたのだ。ひたすらに善きことを信じて進んだみみよりの歴史こそ、お前たちの青春の証左なのだと。

結局、わたしたちが若くて無心だったから、その熱気に対して、大勢の人が「よしきた」と協力してくれたのかも知れません。嫌な記憶はほとんどありませんでした。戦後の貧しい時代の中で、みんな優しい気持ちの人が多かったのです。

最初は、ペンフレンドを求める清水さんの新聞投書に、何人かの学生が「よしきた」と手をあげて応じたのでした。

でも、その後、清水さんを助けるつもりだったわたしたちが、さまざまな人から、「よしきた」と助けてもらいました。いま考えてみると、朝日新聞の堀記者、その記事を見てわたしに手紙をくれた岡田秀穂さん、そして、最初の謄写版印刷を学生割り引きだといって安くし

てくれた孔友舎のみなさん、みみより会がすっかり気に入って、夢中になってガリ切りをしてくれた謄写版の名人前阪典彦さん、日本ろう話学校の大島、望月、松沢の諸先生、「ろう者の教会」の石田英一牧師、みんな「みみより」のスタートを、心から応援してくれたのです。1957年からは、国立聴覚言語身体障害者更生指導所の指導課長をしておられた今西孝雄先生、聴能課長の角田忠信先生に、大変、お世話になりました。東京医科歯科大学の堀口伸作教授も、気さくに原稿協力してくださいました。

前述の創己堂印刷のみなさん。おかげで活版印刷になりました。リオネット補聴器の竹内さんも、「よしきた」と広告を出してくれました。広告をお願いするために、団順一さんと補聴器会社を訪れて歩いたときのことを思い出します。わたしが、みみより編集の仕事ができなくなってからも、浅倉守さんたちが、広告を守ってくれました。リオネット補聴器(いまのリオンです)の広告のおかげで、「みみより」の巻頭には、写真ページを綴じ込むことができました。そして、その写真ページの写真は、フリーカメラマンの指田実さんが、みみより会の例会に密着して撮影してくれました。すこし遅れて高寺志郎さんも写真ページの撮影に協力してくれました。上述の「みみより」50号には、ＮＨＫ３人娘の一人、女優の馬渕晴子さんと彼女のお母さんを撮影した高寺さんの写真が載っています。馬渕さんのお母さんもストマイによる中途失聴者で、みみより会の会員であり、いろいろとお力添えをいただいたのです。

もろもろの恩人のみなさんの中でも、もっとも強力なご支援をいただいたのが、板橋の山田病院の院長である山田潤一、二三さんご夫妻でした。難聴のお嬢さんの庸子さんを心配するご両親は、みみより会の出現を大歓迎してくれました。山田さんのお宅には、たくさんの人が招かれご馳走になりました。くわしいことは、ろうあ連盟の雑誌「ＭＩＭＩ」に連載する小説「このゆびとまれ」に書き、やがて一冊の本にまとめるつもりですから、ぜひ、ご一読願います。

「みみより通信」の発送は、いつも山田さんのお宅の応接間を借りて行いました。

「みみより」創刊号は、15,000円の印刷費が必要でしたが、いくら順調に会費が集まったといっても、創立四、五カ月の会にとっては大金でした。当時は、大学卒国家公務員の初任給が、１万円になるかどうかという時代だったのです。ところが、岡田さんから会の財政状態を聞いた山田夫人は、その場でポンと２万円を寄付してくれたものでした。

そればかりか、山田家の伊東市にある温泉つきの別荘で、海水浴を楽しみながら夏季合宿をやったらどうかと提案してくれました。じっさいにわたしたちは、1955年と1956年の二度にわたって、10日間の伊東合宿を開催したのですが、当時の山田さんのご好意が、金にすると一体いくらになるのか、まるで見当もつきません。

この合宿は、もちろんすごく楽しいものでした。

なにしろ、

また、山田さんのご親戚に当たる漆工芸家の高橋節郎先生は、飄々としたお人柄で、山田さんのお口添えで「みみより」の表紙に、「よしきた」と、華麗なるデッサンを描いてくださ

いました。「元気よくやらなけりゃあだめだよ」、そういってハッパをかけてくださった気さくな高橋先生が、後に文化勲章を受賞されたときには、あっと驚いて、そんなに偉い先生だったのかと不明を恥じました。文化勲章受章者が、「みみより」の表紙に才筆を振るってくださったことは、「みみより」500号の歴史の中でも最高の誇りでしょう。

山田さんのおかげで始まった合宿企画は、はからずも、その後高寺志郎さんたちの奔走によって、1957年の夏に小淵沢合宿となって実現し、以後、長い間、みみより会のイベントとして行われるようになりました。

合宿、グループ活動、地方支部などの運動が、みみより会を活気づかせましたが、これらのことを、最後に次回に書きます。それはやがて、ろうあ連盟を中心とする手話のクローズアップという輝かしい時代へとつながっていくのです。

50号の巻頭に、わたしは次のように書いています。1960年のものですが、その見方は、いまでも、すこしも変わっておりません。

考えてみれば、「みみより会」の今日を築きあげたものは、決して個人の力ではありませんでした。実際に雑誌を作り「みみより会」を維持してきた人々は表面上はほんのわずかの人たちに見えます。けれど、良く考えてみるときに「みみより」の五年間は、団結の歴史であり時代の理解の表れであったと思われるのです。

「みみより」は耳の聞こえる友がほしいと願った一人のろう学校生徒の新聞投書から出発しました。ですから、もしそのろう学校の生徒の投書がなかったら、「みみより」は生まれなかったかもしれません。でも、その投書を新聞が大きくとりあげ解説して出してくれたということに、時代の流れがようやく、この日の当たらない世界にも射し込んできていたことを忘れてはならないでしょう。

私たちの「みみより」は、多くの先人が努力してきた道が、ちょうど大通りにぶつかったところで出発したようなものです。ですからこれからの「みみより」は、私たちがすこしでも幸せになれるように、この大通りをたどりながら、一つ一つ考え、討論しあってゆく場でなくてはなりません。「みみより」が誠実にその道を進むとき、失われていたように見える聴覚障害者の青春が、そこに金字塔のように輝くに違いないのです。

えとき　ひさし・本名 丸山　一保(千葉県習志野市袖ケ浦)
みみより会参与
オリジナル原稿

1. みみより会の発足

江 時　久

13. 開けっ広げだったみみより会

「山と渓谷」の今年の４月号に、高寺志郎さんが撮影した岩手県の櫃取湿原のすばらしい写真が５ページにわたって掲載されています。高原の澄んだ空と空気が、すっと胸に入ってくるような美しい写真です。

いまも、プロの山岳写真家として活躍している高寺さんは、みなさんがよくご存じのように、失聴のために日大芸術学部写真科を中退されて、日本ろう話学校の読話講習会に通いはじめたことから、団さんや、鈴木さんと知り合いになりました。

スポーツ万能の偉丈夫で、ダライラマというニックネームで呼ばれ、みみより会に参加すると、早速スキー合宿の計画をたてて、みんなを白銀の世界へ引っ張り出してくれました。以後、みみより会の夏と冬の合宿やハイキングについては、いつもラマさんが先頭に立ってリードしてくれたのです。

みんなで一緒に旅をしたり、スポーツをやったりした合宿の実績は、若いみみより会をますますですが、50周年を迎える機会に、ぜひもう一度、その意義や思い出などをまとめてほしいと思います。

● 映像記録について

忘れてはならないのは、「ろう者の教会」のころから、みみより会の記録を永田哲雄さんが、８ミリとビデオに収録しつづけてくれていたことです。

永田さんは、加藤光二さんや伊藤由吏代(現在の事務局の矢島秀子)さんと一緒に、戦前の小日向台町小学校の難聴学級の同窓生で、みみより会が始まる前から、「ろう者の教会」に集まっていました。

みみより会がはじまると、山登りが好きだった永田さんは、ほとんどの例会や合宿に参加して、若かったころのみんなの表情を、だまって撮影し続けてくれたのです。

永田さんの他にも写真が好きな人たちが大勢いましたから、集まりの都度、たくさんの写真が写されていました。仲間たちの写真を集めることによって、みみより会の歴史は、いまでも生き生きと再現することができるのではないかと思います。

● グループ活動

手芸グループという女性たちの集まりが、1955年から須藤多恵子さんや、鈴木光子さんを中心に活発な運動をはじめ、新宿や銀座で手芸品の即売バザーを開催したりしたことは、前に紹介しましたが、これに対して、洋服の仕事をする人たちが1958年に辻三郎さんを中心にテーラーズグループを作り、ラジオで取りあげられました。

● グループ活動

手芸グループという女性たちの集まりが、1955年から須藤多恵子さんや、鈴木光子さんを中心に活発な運動をはじめ、新宿や銀座で手芸品の即売バザーを開催したりしたことは、前に紹介しましたが、これに対して、洋服の仕事をする人たちが1958年に辻三郎さんを中心にテーラーズグループを作り、ラジオで取りあげられました。

そのころのみみより会は、ときどき、マスコミにとりあげられていたのです。

難聴の建築士浅倉守さんを中心にした美術グループは、デッサン講習会を開いたり、展覧会の見学会などをはじめました。その後、みみより会の中には、現在の茶道部やパッチワーク教室や書道部や俳句グループなどに至るまで、さまざまなグループ活動が次々に起こりましたが、そのエネルギーの歴史も、50年を支えてきたのだと思います。

● 地方支部の結成

みみより会の地方支部は、「みみより」の読者の中から、1957年に関西支部と茨城支部が生まれ、翌年に福島支部ができました。つづいて、1959年には、静岡支部が生まれました。わたしが編集したころの「みみより」は開けっ広げで、原稿執筆者の住所を原稿の末尾に明示しました。また、新入会員は必ず氏名・住所・職業・年齢・聴力まで誌上で紹介しましたから、どの県に、どういう仲間がいるか、どうしたら連絡ができるか、そういうことは毎月の「みみより」を原稿を書くと読んだ人の感想が、直接、書いた人に手紙で届いたりしたものです。

会員が「みみより」を仲介にして意見を交換し合ったりたりできるのが、みみより会を活性化させることだと、当時のわたしは思っていたのですが、いまでは、プライバシー保護の理由で、住所どころか、例会参加者の氏名も「みみより」誌上には書いてありません。だから、ホー、あいつも例会に参加しているのか、では来月は、おれも行ってみようという具合にはならないのです。残念なことですが、会員の情報を伝えなければ、みみより結婚も、地方支部の運動も、なにも動かなかっただろうと思います。

● みみより結婚

みみより会に集まった人の多くは、一人ぼっちで友を持たない人たちでした。みんな、例会に参加し、会員情報が満載された「みみより」を読むことによって、お互いに耳が聞こえない仲間の中にも、元気な青年男女がたくさんいることを発見できたのです。みみより会は、そのための集まりだったといってもいいでしょう。若い人たちが集まって親しみを交わし合ううちに、当然のことですが、カップルが、次々に誕生しました。

みみより会の集まりの中で互いに恋をして結ばれた人たちのことを、わたしたちは、「みみより結婚」と呼んで祝福しました。

高寺志郎さん、加藤光二さん、伊藤由吏代さん、浅倉守さん、みんなみみより結婚です。みみより会の50年の歴史は、みみより結婚した人たちのたくさんの愛情が支えているのかもしれません。

以上、1954年の清水昭雄さんの新聞投書から、1960年までのことを中心に書いてみました。　わたしが編集した「みみより」の原稿の一つ一つには、たくさんの思い出があります。

それは厖大なものですから、それを列挙し分析する作業は、またべつのときにしたいと思います。そこには聴覚障害者の社会的な問題が、すでに網羅されています。

1960年以降、わたしは、思い切ってみみより会の役員を退くことにしました。いろいろ考えた末のことです。

順調なみみより会は、どんどん大きくなっていましたから、いくらでも仕事があります。なにしろ、毎日、読者からたくさんの手紙が届くのです。その応接だけでも大変でした。といっても、みみより会の仕事は、あくまでも社会奉仕ですから、生活のためには会社に勤務して会社の仕事をしなければなりません。みみより会をとるのか、会社をとるのか、みみより会から生活の保障を得るわけにはいかなかったのです。随分悩みました。

このことは、おそらく歴代の役員のみなさんが、同じように悩んだ問題だと思います。

みみより会のために仕事をすることは、やればやるほど、愛着も強くなります。自分が辞めたらみみより会は困るだろうと、だれでも、そう思うのです。

しかし、いまにして思うのは、みみより会は、みんなで協力し、交替しながらやってきたから、50年も続いたということです。思い切ってみみより会の役員を団さんや、鈴木さんと交替して退いたことは、結果としては、よかったのだと思っています。

わたしたちは、みんな目が回るような勢いで変化する戦後の時代を生きました。

みみより会がはじまったころは、まだ、テレビも誕生したばかりで、車だってトヨタやダットサンの生産が、戦後はじめて復活したばかりの時期でした。洗濯機や冷蔵庫が作られはじめましたが、普通の家庭にはまだ電話がなく、FAXも、コピー機も、電卓も、ビデオテープも、もちろんメールやパソコンやDVDや、ましてデジカメや携帯電話などの夢のような器具は、まったくない時代でした。新幹線もなかったのです。

科学技術の進歩は、ウサギがお餅をついているはずの月にアポロを打ち上げました。

するとそこには、ウサギどころか、生物のいない砂だらけの荒涼とした世界があったのです。現代でもまだ、月を見てウサギの餅つきを連想する人は少なくありませんが、あまりにも急速な変化に、人の認識が追いつかないのです。

1954年ごろから、真空管の代わりにトランジスタが使われるようになり、補聴器がポケットに入る大きさになりました。1970年ごろになると、ICを使った耳かけ式となり、さらには、現代の耳穴挿入式へと進歩して、20世紀後半の時代には、たくさんの難聴者が、補聴器の恩恵を受けることとなりました。

その難聴者の中にも、伝音性難聴と感音性難聴があることが、はっきりしてきて、伝音性難聴の医療手術は、1960年ごろから次第に確実なものに進歩しました。

1980年代の後半になると、人工内耳手術がはじまり、中途失聴のろう者が聴力を回復する成功例が現れました。いまでは、大勢のろう者が、順番待ちで人工内耳手術に挑戦する時代になりました。21世紀の医療は、いま、内耳神経の再生に取り組んでいます。

ろう教育界は、20世紀の100年をかけて、口話教育への希望と挫折を経験しました。100年経っても、口話法は成果を残すことができなかったのです。

みみより会がはじまったころ、非常に熱心にろう教育の宣伝をしていた教育者たちは、いまでは、ろう教育への情熱を失ったようにさえ見えます。親たちは、ろうの子供を、ろう学校ではなくて、普通の学校へ進学させます。

それに対して、1970年代からはじまった手話によるコミュニケーションの広がりは、手話通訳の実現や手話講習会の普及などによって、画期的に社会に浸透しました。

みみより会の例会でも、理事会でも、手話通訳や要約筆記の導入によって、いまでは、会議や討論や講演会の実施が可能になっています。

しかし、ろう教育の現状は、依然として手話を覚えない先生たちが口話法で教えています。急速な時代の変化に、認識が追いつかないという愚かしい現代の例証といってもいいでしょう。むかし、みみより会の発足に力をかしてくださった川本宇之介先生や、大嶋功先生が、どれほど手話に対して偏見を持っていた人たちだったのか、その人たちの影響がどれほど現代のろう教育を無気力にしてしまっているか、ということが、いまになって、わたしたちにもよくわかるのです。

みみより会の最初の声をあげた京都ろう学校の清水昭雄さんは、すでに亡くなられましたが、「みみより」創刊号が発行された直後、京都から東京へ出てきて武井利文さんのアパートに転がり込みました。しかし、当時はろうの青年を迎えてくれる職場などはありませんでしたから、ろう者ばかりで経営している三軒茶屋のニコニコランドリーに、すこしの間勤めましたが、彼は、それからまた京都へ戻って、音信が途絶してしまいました。

わたしたちが再会したのは、30年ほど経ってからのことです。清水さんは、立派に京都で生活しておりました。

いま、清水さんのことを思いながら、最初と最後に彼が登場する小説を書いたところです。

ろうあ連盟からの提案がありましたので、その小説「このゆびとまれ」を、ろうあ連盟の雑誌「ＭＩＭＩ」に連載の形で掲載することにしました。ろうあ連盟の雑誌に載りますが、それは、みみより会の話です。それと同時に、みみより会が持つ問題は、日本のすべての聴覚障害者の問題でもあると思うのです。

清水さんのお墓に、昨秋お参りに京都まで行きました。彼の奥さんと娘さんに案内してもらいました。清水さんが、いつも名取裕子に似ていると自慢していた優雅なお嬢さんはすでに結婚してお孫さんが二人います。奥さんと、手話で話しながら、いまの時代だったら、清水さんとも、手話でたくさん話ができたのになあと思いました。

口話教育のろう学校で秀才だった彼は、みんなの前では、手話の手の字も使わなかった人でした。奇妙な話ですが、50年前の常識は、いまから思うとおかしなこともいろいろあったので

えとき　ひさし・本名 丸山　一保(千葉県習志野市袖ケ浦)
みみより会参与
オリジナル原稿

No.14

2. みみより会手芸グループについて

須 藤 多恵子

14. みみより会手芸グループについて 1

昭和28年、朝日新聞朝刊の家庭欄に「ひととき」というコーナーがあって(今もある)、ストマイツンボについて「音をなくした主婦」という私の投稿が載りました。

このとき、同じ紙面にストマイを使って耳がきこえなくなった飯田光子さんの状況も載りました。

飯田さんはまだ入院中で、夫に渡された紙にハンコを押したら離婚届にされたそうです。朝日の記者から、飯田さんの友だちになって上げてくださいといわれて、文通が始まりました。

光子さんは、鈴木姓になりました。

私の投稿への反響の中から、新堀昭子さんという方が、「いま、中途失聴者にも呼びかけている団体が新しくできたから」と、誘って下さり、はじめて「みみより会」へ出かけました。病み上がりの30歳でした。

昭子さんの髪に挿した白い櫛が初対面の目印で、中屋恭子さんに筆記介助をして頂いたことまで覚えているのに、会場がはっきりしません(どこか学校のようで……そうそう目白のろう学校だったかしら)。

まだまだ、みみよりの名はなく、団さん、高寺さんの入会の前でした。

丸山さん、鈴木克美さんが黒板を使って司会していました。みな、学生さんで、新堀さんや、30歳の私でさえ、オバサンでした。

退院した鈴木光子さんも見えるようになって、彼女は和裁が上手だし、刺繍のプロ佐藤禎子さんその他、手芸の好きな人、洋裁で食べていける人も多く、手芸の女性グループができました。

光子さんと、岡田菊江さんという人(会長夫人岡田菊恵さんとは別人)が、バザーを提案し、第一回は日本ろうわ学校で、例会が進行している近くの一室をお借りして、飾りつけられました。

大変好評で、ことに西潟雅子さんのピノキオ人形が人気でした。ハンカチ、鍋つかみ等がありました。

みみより会の例会で、みみより会の方に買っていただくより、外でバザーをしたら？という光子さんの新しい提案で、グループ名簿も作り、(はじめから解散するまで、常に60人あまりでした)、会場を光子さんが一生懸命さがして、その中に無料の東電サービスセンターというのがありました。

そのころから何くれとなく相談にのって下さっていた雅子さんの母上西潟春子夫人が東電ならご主人につてがあって、話がしやすいと交渉して下さり、本来売買はしないところですが、大目に見ていただき、爾来二十年間近く毎年欠かさず春秋２回バザーを開いてきました。

毎月グループだよりを刷り、当番の作業する場所は西潟さんのお宅を拝借、楽しい活動がはじ

互いに技術交換ということもして、雅子さんにピノキオを習ったのをはじめ、禎子さんの日本刺繍、高坂昌子さんのフランス刺繍、太田君枝さんのマリオネット、スモッキングの技術を提供して下さる健聴者もあり、中田幸子さんがエプロンや子供服のデザインと縫製指導を、池田紀子夫人がろうけつの講習と、どんどんレパートリーを増やしていきました。

外でのバザー第一回は、鈴木光子さんと一緒に朝日新聞社の社会部に出かけて記事にしてもらい、押すな押すなの盛況で、「にをお手伝いしていいかわかりませんわねえ」と仰っていた西潟夫人は、池田夫人とずっと会計を受け持って下さるようになりました。

西潟夫人は、この会計に集まるお金を上手に管理して下さり、グループの背骨になられました。

また、湯本信郎という浦和の税務署の人が、バザーでの販売方法、カードの作り方、値段のつけ方等、まことに適切な指導をして下さり、世にも高潔な税吏で、勤勉の結果、早く逝かれたことは惜しまれてなりません。「もストマイで命拾いをしたので」と、新聞を見て協力を申し出られたのでした。

バザーの売り上げは個人に戻り、その中から各自一割を拠出という制度でしたから、20年近い間に一度ならず訪れた不況にもおどろかず、グループが赤字になるということは一切ありませんでした。

積み立ては徐々に、しっかりと、しかし少しずつ、増えていきました。販売ばかりでなく、グループ員の親睦をはかり、毎年の新年会、ハイキング、新宿御苑での周遊、スケッチ会もあり、会場も世田谷公民館を借りたこともあります。

顧客名簿を作ってバザー毎に案内状を出し、ＮＴＶに放映されたり、毎日新聞や、週刊東京に写真記事にしていただいたりしました。これは、それぞれ渡部若枝さんと鎌田久子さんの手配でした。久子さんは、日ろう校で松沢先生に紹介されて以来の健聴の魅力的グループ員で、鎌倉の新婚のお宅に、皆で海水浴におしかけたりしました。このときは、丸山氏も見えました。

総じて女性の活動力に大いに賛同してくださった岡田会長、丸山、鈴木の諸氏はじめ男子のみみより会員のご声援も大きな後ろ楯でした。

ストマイ仲間の渡部若枝さんが早くからグループ員になり、アクテイヴな方でグループからスターは出さない方針から、２年ぐらいで代表（２人ずつ）を替わり合いましたが、よく代表もつとめてくださり、一緒にみみより事務の矢島秀子さんの要請で、事務室の障子張り替えに行ったりしました。

みみより会の申し出をうけて、日ろう校の一室をお借りして、手芸グループで昼食を提供したこともあります。これは、岡沢民子さんがリーダーで、大変よろこばれました。カレーライス等が、チケットを切ってどんどん出ました。飲食の提供を無届でしている、というつまらぬ心配から、中途で止めようといった私の失敗は、返す返すも申し訳なかったと思っています。

一生懸命したという記憶はいいもので、今でも旧グループ員は、たのしかったねえと、(グループ活動全般について)ため息をつきます。

私が50歳をすぎたころ、体力に限界を感じ、思いがけない中傷の出現に驚き、また、後を引き継いでくれると思っている人に辞退され、ついに積立金100万円を潔くみみより会に寄贈して、グループは解散したのでした。

この100万円について、グループ員に分けたら、という声もありましたが<各入会時期も異なり、一人一人の事情もさまざまで、母団体の隆昌を願うのが正しいと考えられました。

解散して十余年になります。私利私欲をすて、皆が一致して、正直な、心のこもった作品を作りつづけ、買う人によろこばれてきた、一同の心の誇りの、思い出の手芸グループです。

いまも年一回、三田で集まって、近況を報告したり、舞踊、講演、ビデオ等を楽しんでいます。20名ぐらい集まります。

文中、西潟雅子さんは高寺姓に、高坂昌子さんは長谷川姓に、鎌田久子さんは荒谷姓に、太田君枝さんは山本姓になられました。

渡部若枝さん、太田君枝さん、田代孝子さん、そして西潟春子様が逝かれました。ご冥福を祈ります。

(平成３年２月４日)

■ 須藤多恵子さん紹介

1923年生れ

1941年東京府立第３高女卒。

1944年結婚

1951年以後結核治療のストマイのためにしだいに失聴。

1955年みみより会に参加。手芸グループ代表として大活躍。

絵画美術、書道の才を発揮、二人展２回、個展２回

文化書道学会師範

1983年以後緑内障により視力を失う。

1999年絵画、書幅、鎌倉彫に関する作品集「花眼譜」発行

2001年エッセイ「むかしの昔」発行

すどう　たえこ(埼玉県さいたま市在住)

元みみより会手芸グループ代表

オリジナル原稿

■ 手芸グループについて ■

みみより会の初期から20年以上の長い間、須藤多恵子さんを中心に、手芸グループという女性だけの集まりが活発に独自の運動を行い、当初、学生たちだけの運動だったみみより会に多様な広がりを与えてくれました。

手芸グループの活動については、きちんとした記録に残しておくべきなのですが、すでにグループが解散してから20年も経過していますし、須藤さんがずいぶん前から目も不自由になってしまわれましたので、細かい事実について須藤さんに書いてもらうことができません。

しかし、平成３年２月４日に、68歳の須藤さんが不自由な目で書いて下さった原稿と、昨年、須藤さんが書いて送ってくださった原稿を、丸山が預かっております。これによって、手芸グループの活躍の内容などは、よくわかると思いますが、残念ながら具体的な年月の記入がありません。

それは何年何月、どこの場所で行われたという事実をご存知の方は、教えていただければ幸いです。　　(丸山　一保)

2. みみより会手芸グループについて

須 藤 多恵子

15. みみより会手芸グループについて 2

「みみより会」が発足して、しばらくたって、会員になった女性に手芸の好きな人が多いことに気づいた鈴木光子さんの提言で、佐藤禎子さん、西潟雅子さん、須藤多恵子など、数名が参じました。

桜上水の日本聾話学校で催された「みみより例会」に便乗して、一室をお借りし、第一回の手芸バザーを試み、みみより会員がのぞきにきては、何かと買って頂きました。雅子さんのピノキオ人形が好評で、みなさんが心を込めた、針刺し、ドイリー、テーブルセンター等、思いのほか多くの作品が並びました。みなさんによろこばれ、ご声援がありました。

しかし、耳の聞こえない者が作って、耳の聞こえない者に売ってもというので、外に進出の計画がはじまりました。鈴木光子さんがあちこち調べて場所を探しました。

さて、という時、雅子さんの母君、西潟春子さんのご夫君の知人が東電サービスセンターの方で、元来は商売には使わないサービスセンターの二階を、春秋の２回、土曜、日曜にかけてお借りできるというご厚意を受けました。

そこで、鈴木光子さんと須藤多恵子が、朝日新聞社に出かけ、社会部家庭欄の係りの人と会って、はじめからのことの次第を語り、「聞こえない私たちが、心をこめて作る良い作品を皆様にお目にかけたい」と述べて、早速記事にしてくださり、私たちグループ員は集まって話し合い、急遽細かい準備や用意がはじまりました。

耳の聞こえる理解者の協力も忘れられません。

西潟さんのお宅は、何かにつけ集合場所になりました。

上尾の税務署に勤める湯本信郎さんという若い方が、「私も、ストレプトマイシン使っていた一人です」と、帳簿のつけ方、値札の作り方を手にとって教えてくださいました。

エプロン、手提げ、ハンカチーフの刺繍、可愛いお人形。

しだいに作品が集まって、西潟さんに持ち寄り、値段を決め、出品票を作り、何とワクワク楽しかったことでしょう！

当日は、「スリでも出ないか」と、心配するほど混みました。「会計・案内」と書いたところには、健聴者の西潟春子さんと池田紀子さんが座り、上手にさばいてくださいました。

当日の売り上げは、出品票の半片によって一人一人集計をし、その中から１割をグループに積み立てとして集め、あとは個人の利益として渡しました。グループ費は、西潟春子さんが上手に管理してくださいました。その記録、集計は今もスクラップブックに貼られて残っています。

また、「みみより手芸グループだより」を、毎月西潟さんに集まって、５、６人で手作り、最盛時には62名になったグループ員に発送の仕事をしました。手弁当持ちで楽しく励みました。

バザーでは、良い作品から売れて行くので皆どんどん上達します。手芸の教え合いをし、はじ

めが雅子さんのピノキオ人形でした。禎子さんの日本刺繍、高坂昌子さんのこぎん刺し、紀子さんのろうけつ染め。光子さんのお家に小松道好先生という手芸家をお招きして教えていただいたこともあります。

中田幸子さんが、エプロン、子供服を大量に裁断して、それをグループ員が手分けして縫製し、バザーを賑わしたこと。賛助出品された寺瀬淳一様の木彫りのすばらしいアクセサリー類が、出品の品位を高めたことも忘れられません。寺瀬さんは、みみより会の会員で、日本聾話学校の木工科で久しく教えられ、出品作品には、その教え子の方々の力作も多くありました。

方々の美術館などを訪ねて、センスを磨くことにも励みました。日本民芸館、根津美術館、下谷竜泉寺の一葉記念館など、印象深い所でした。荒谷久子さんの鎌倉のお住まいに皆で訪ねて、海を楽しんだのも思い出です。

みみより会の要請で、例会時の昼食を引き受け、日本聾話学校の炊事場をお借りして、岡沢民さんがリーダーになり、ご飯を炊いてカレーを作り、カレーライスとして売ったのが好評で、楽しそうに働いていた田代孝子さんの姿がありました。

新宿東電サービスセンターの春、秋のバザーは、毎回盛会でした。主旨に賛同して賛助出品もあり、こちらは売り上げの２割を醵金していただきました。

作品の売れ残りを取りにこない賛助出品者を待って、秋風が吹き始めたセンターの前で、星の旧手芸グループＯＧ会」となった残留グループ員の毎年の集まりに、なくなるまで充てました。

それから、また20年。しっかりと手を取り合って励んだ同志の心の結びつきは固く、今年もＯＧ会の当番が相談をはじめるところです。形のあるものは、いつか終わりがあるけれど、目に見えないものは永遠です。希望、愛情、思い出などがそれです。ＯＧ会も、いつかは終わるときがあるでしょう。

終わりに物故されたグループ員を偲びたいと思います。

渡部若枝、西潟春子、池田紀子、田代孝子、山本君枝、岡本都美子、滝口寿々子、田中保子、岡沢民の皆様方です。（順不同、敬称略）

（平成14年５月）

■ 須藤多恵子さん紹介

1923年生れ

1941年東京府立第３高女卒。

1944年結婚

1951年以後結核治療のストマイのためにしだいに失聴。

1955年みみより会に参加。手芸グループ代表として大活躍。

絵画美術、書道の才を発揮、二人展２回、個展２回

文化書道学会師範

1983年以後緑内障により視力を失う。

1999年絵画、書幅、鎌倉彫に関する作品集「花眼譜」発行

2001年エッセイ「むかしの昔」発行

すどう　たえこ(埼玉県さいたま市在住)
元みみより会手芸グループ代表
オリジナル原稿

■ 手芸グループについて ■

みみより会の初期から20年以上の長い間、須藤多恵子さんを中心に、手芸グループという女性だけの集まりが活発に独自の運動を行い、当初、学生たちだけの運動だったみみより会に多様な広がりを与えてくれました。

手芸グループの活動については、きちんとした記録に残しておくべきなのですが、すでにグループが解散してから20年も経過していますし、須藤さんがずいぶん前から目も不自由になってしまわれましたので、細かい事実について須藤さんに書いてもらうことができません。

しかし、平成３年２月４日に、68歳の須藤さんが不自由な目で書いて下さった原稿と、昨年、須藤さんが書いて送ってくださった原稿を、丸山が預かっております。これによって、手芸グループの活躍の内容などは、よくわかると思いますが、残念ながら具体的な年月の記入がありません。

それは何年何月、どこの場所で行われたという事実をご存知の方は、教えていただければ幸いです。　(丸山　一保)